

文芸

俳句

梅の実に振り回されて疲れをり

池田 逸子

染め抜きの紺の暖簾や風薫る

伊藤 敬子

孫三歳三つ身の浴衣肩上げし

今関満喜子

斎場に咲く紫陽花や雨を呼ぶ

魚地 照子

この里に住み古りゆかん夏木立

江森 悦子

未来とは来たのかまたか夕端居

川島 通則

富士の嶺の世界遺産や風薫る

向後 寛

積木細工作る孫の眼五月雨

越川せつ子

ざわざわと青葉かうたう木立かな

小松 藤男

鎌立て、缶ジュース飲む夏木立

佐瀬 輝夫

子燕の戻り来てまた東に遊ぶ

椎名万里子

雨三日青田ひとつに繋がりぬ

鈴木とし子

空豆の実のたつぷりと里の味

鈴木 利子

滝音のふもとに近きまで聞こゆ

玉虫 栗扇

梅雨晴れの畑のにぎわい夕迫る

土屋美枝子

引揚げの日日の語らる梅雨深し

土屋 義昭

仙我滝の前に佇ちたる絆かな

戸村 静華

緑陰といふ懐に話し込む

藤田 雅夫

短歌

かじり癖治らぬ犬よ叱る吾に

八角 三枝

「どこがいけない」目が問ひぬたり

しつとりと落葉を濡らす湧き水は

小さき流れに山峡に入る

芹川 初子

緋の色のサルビアの花の中に立ち

埴輪は両手に現世いだく

目分量に掘り来し辣蕪漬込むに

過不足もなく瓶におさまる

野道ははやも露の宿せり

少しづつ胸にたまりし澱なるも

息子と話すに解る気のせり

そよ風が薄紫の花菖蒲

揺らし過ぐるを縁側に見る

曾祖父の植えし杉の木切らるるを

家族と立ちて見守りいたり

新緑の箱根路義姉と語りつつ

石畳の道ゆつくり歩く

いつまでも元気でいたし指先は

今日も算盤音たて弾く

命日の近づく父に供へてと

庭の紫陽花姉に頼みぬ

朝六時栗山橋を灯しあゐる

外灯はつと一斉に消ゆ

浅野 榮子※

平山 芳子

鈴木まさ子

齊藤つね子

伊藤 定男

内藤 くに

越川 義則

高梨 キヨ

こうほう 博物館 65

丸いポスト

今の郵便ポストは、四角い箱型であるが、昔は丸い形のポストであった。左の写真は東陽郵便局に設置されていたポストで、大正2(1913)年に同局が開局したときから使われた物であるという。このポストは鉄製で、御影石の上に載せられ、高さが約133cm、幅が約35cmあり、この大きな赤い物体が郵便局の前に鎮座している姿は、威厳すらも感じられた。しかし、その大きさをゆえ、多くは邪魔者扱いされ、そのほとんどがコンパクトな箱形にかわっていった。それでも全国には、いまだに丸形ポストを使っていたり、そのレトロ感からこのポストが復活しているところもあるという。

町内では、もう丸形ポストは見られなくなったが、東陽郵便局に置かれていた物を、宮川在住の橋浦氏が大事に保管していた。今回、東陽郵便局開局100周年に合わせ、町民ギャラリーでは懐かしい丸形ポストや郵便に関する資料を展示しますので、ご覧ください。



▲東陽郵便局で使われていたポスト